

○ちゃんの「革命」

そうだ

あのヒゲのおやじ

○ちゃんの頭のなかでは

「革命」とは 何か こう

すべて良くなっていくことの代名詞なのだ

○ちゃんにとっては

未来への期待は すべて

「革命」の名を冠して称ぶに値するのだ

たとい

その期待が

どんなに荒唐無稽であろうとも

どんなに手前勝手な妄想であろうとも

それに「革命」の名を冠して称ぶ

あの 五〇を過ぎても

一向にうだつのあがらぬ

善良で しがないおやじの心根を

笑うことが

とても できようか

くたびれ果てた家計

部屋中 波打っている畳

いつも眠っているような女房

手のつけられぬ育ち盛りの子供たち
それやこれやをどうすることもできず
滅入る心を酒にはらし
われとわが身を無軌道に追いやる
あの ○ちゃん

いま 人生の黄昏に立って
ついにいまだ

本当の暮らしの一頁ももったことのない
あの ヒゲのおやじは
今夜もまた酔いしれて
鼻水と涎と涙を混ぜて

「革命」の歌をうたっている

「晴れた五月に青空に・・・」
歌っている

「世界をつなげ花の輪に・・・」

(一九五四・五)